

法然における極楽浄土

齋藤蒙光

一. はじめに

宗名にも掲げられているように、「往生浄土」は法然(一一三三—一二二二)の思想の根幹的要素である。だが、主著『選択本願念仏集』をはじめとする法然遺文においては、往生すべき「極楽浄土」についての説明が少ない。なぜ法然は、極楽浄土について積極的に語ろうとしないのだろうか。語られる意図ではなく、語られない意図を読み取ることは難しい。

もともと、法然の説法の記録と伝えられる『無量寿経釈』や『逆修説法』には、極楽浄土に関する説示が比較的多く記されている。筆者はかつて、それらの記述内容に基づいて、法然の極楽浄土に対する受け止めを考察する論文を発表した¹が、その後の研究活動の中で新たな知見を得たため、今一度の論考を試みてみる。

二. 先行研究について

戦後の昭和期、一部の浄土宗学研究の間で、浄土宗の教義を現代的に表現し直そうとする動きが広がった。その一環として、「往生浄土」についても通仏教的かつ合理的な表現が模索され、「指方立相」の浄土から無相・真実・智慧の

涅槃界へと遡る解釈が試みられた。そこでは、今生における念仏実践や信の確立、善行において体得した宗教的境地を往生、さらには覺りと等しいと見なすべきだという主張がなされたのである。それに対して、伝統的な理解を守ろうとする研究者からも反論が寄せられ、「往生浄土」の解釈を巡る活発な議論が展開された²。藤堂恭俊氏は、浄土教思想の発展の中で、無自性・空である真実・勝義から極楽の莊嚴や人格仏としての阿弥陀仏などの具体相が表現されたことの意義について論じている³。また香月乗光氏は、宗祖・法然に立ち返るよう呼びかけ、「法然にとっては、浄土は何かの問題よりも、如何にすれば浄土に往生出来るかの問題が、更に切実であり、緊要であったのである」と述べた⁴。法然自身が注視した教行の選びの意義をこそ明確化すべきだという香月氏の提言は、その後の法然研究に大きな影響を与え、「往生浄土」の解釈を巡る議論は収束していった。

もつとも香月氏は法然遺文より、弥陀の浄土は報土であること、願力の所成であること、指方立相であることが強く主張されているという点を読み取つてもいる⁵。さらに服部正穩氏は、詳細に法然遺文より極楽浄土に関する説示を抜き出し、その内容について分類している。すなわち、法然は極楽浄土を西方十万億土の彼方にあつて娑婆・穢土と區別された他方世界と位置付けていること、法然においては彼此を分けな己心浄土説が否定されていること、往生の利益として超過三界が説かれること、往生後に開悟し還相回向を遂げるという筋道が語られていること、衆生を救済する意図・衆生に欣求心を起させる意図から極楽の莊嚴がなされていること、それらの莊嚴は「願力所成」であること、極楽は無漏の報土であることが語られていると、服部氏は指摘する。

本論では、香月氏や服部氏の見解を継承しつつ、法然の説示とその典拠と思しき経論章疏の記述とを比較し、法然が極楽浄土について語る意図、そして語らない意図を、より厳密に読み取つていきたいと思う。

三 『無量寿経釈』における説示

跋文や通説によるならば、『三部経釈』は文治六年（一一九〇）、東大寺において法然が他宗の僧たちの前で浄土三部経を講説した際の講義録である。その中の『無量寿経釈』において、法然は法蔵菩薩の修因・感果について説明している。「修因」は発願・修行を意味するが、ここでは前者に当たる「四十八願の興意」に注目したい。

抑^モ此ノ四十八ノ願皆有^レ拔苦与楽之義。尔^ル故者^ハ、大悲者^ハ拔苦^{ナリ}、大慈^ハ者与楽也。第一ノ無三惡趣^ハ、大悲拔苦也。第二ノ不更惡趣^ハ亦是^レ大悲拔苦也。第三ノ悉皆金色^ハ、者是^レ与楽也。第四ノ無有好醜^ハ亦是^レ与楽也⁶。

法然は、法蔵菩薩が発した四十八願には、それぞれ「大悲」すなわち「拔苦」、もしくは「大慈」すなわち「与楽」の義が具わっていると説く。四十八願における拔苦与楽については、浄影寺慧遠（五二一―五九二）の『無量寿経義疏』に見られる。

四十八願中、二十三及第十七是撰法身願、第三十一第三十二是撰浄土、余四十三是撰衆生。文別七者、初十一願為^レ撰衆生²。（中略）就^二初段中^一、初有^二阿願^一、願^レ生^二無苦^一、後之九願、願^レ生^三得楽^一⁷。

慧遠は、四十八願のうちの四十三種の願を阿弥陀仏が衆生を利するための「撰衆生」の願と分類しており、そのうちの第一願と第二願を「願生無苦」、第三願から第十一願までを「願生得楽」と位置付けている。これは新羅浄土教者の憬興（七世紀頃）⁸などの諸師に継承されている伝統的な解釈であるが、「拔苦」「与楽」の義を四十八願全てに敷衍しているところに法然の独自性が見出せる。

法然は次のように続ける。

乃至十八ノ念仏往生ノ願ニ有^二三意^一。出離生死^ハ是^レ拔苦也、往生極楽^ハ是^レ与楽也。生死衆苦、一時ニ能^ク離^テ、浄土ノ諸衆、一念ニ能^ク受^ク。若シ弥陀ニ無^ク念仏ノ願、衆生不^レ乘^二此ノ願力^一者^ハ、五苦逼迫ノ衆生、云何シカ^レ離^ル苦界^ヲ。過去

生生世世不_レリケレハ 値_ハ 弥陀ノ誓願ニ者、于_レ今在_ニ 三界皆苦ノ火宅ニ、未_レ至_ニ 四德常樂之宝城_一。

四十八願の中でも、特に第十八「念仏往生の願」には「生死衆苦」「三界皆苦の火宅」を離れさせる「拔苦」と、「四德常樂の宝城」すなわち極樂浄土へ往生させる「与樂」とが共に具わっていると述べ、その重要性を強調している。そして法然は、往生の後の極樂浄土における「与樂」の内容にも言及する。

次_ニ 往生ノ極樂ニ之後、身心受_ニ 諸_一 樂ヲ、眼_ニ 拜_一 見_シ 如来ヲ瞻_レ 仰_レ 聖衆ヲ、毎_レ 見_ル 増_シ 眼根ノ樂ヲ、耳_ニ 聞_ニ 深妙ノ法ヲ、毎_レ 聞_ル 増_シ 耳根ノ樂ヲ。鼻_ニ 聞_ニ 功德ノ法香ヲ、毎_レ 聞_ル 増_シ 鼻根ノ樂ヲ。舌_ニ 嘗_ニ 法喜禪悦ノ味ヲ、毎_レ 嘗_ル 増_シ 舌根ノ樂ヲ。身_ニ ハ 蒙_ル 弥陀ノ光明ヲ、毎_レ 触_ル 増_シ 身根ノ樂ヲ。意_ニ 縁_ニ 樂之境ヲ、毎_レ 縁_ル 増_シ 意根ノ樂ヲ。極樂世界ノ一一境界、皆_ナ 離苦得樂之計_一 也。風ノ吹_ク 宝樹_ニ 是_レ 樂也、枝條華菓韻_ニ 常樂ヲ。波ノ洗_モ 金沙_ニ 是_レ 樂也、微瀾廻_ニ 流_一 四德ヲ。洲鶴囀_ル 是_レ 樂也、根力覺道ノ法門_ニ 是_レ 樂也。塞鴻ノ鳴_モ 是_レ 樂也、念仏法僧ノ妙法_ニ 是_レ 樂也。歩_モ 宝地_ニ 是_レ 樂也、天衣受_レ 踏_ラ 入_ル 宝宮_ニ 是_レ 樂也、天ノ樂ノ奏_レ 耳_ニ 是_レ 樂也。

「功德の法香」や「法喜禪悦の味」など、「極樂」においては六根を通じて見聞き、接触するものが全て仏法の「樂」をもたらし、阿弥陀仏の「離苦得樂の計りごと」によって設けられていると説かれている。

この抜苦与樂に関する説示と似た記述が、恵心僧都源信(九四二—一〇一七)の『阿弥陀経略記』にも見られる。源信は『阿弥陀経』の「其国衆生、無有衆苦、但受諸樂、故名極樂」を解釈するに当たり、次のように記している。

言_ニ 衆苦_一、総_ソ 有_ニ 八苦_一。彼土衆生ハ、由_リ 大善根_ニ、蓮華_{ヨリ} 化生_ス。故_ニ 無_シ 生苦_一。常_ニ 少_ク 不_レ 老_カ 故_ニ 無_シ 老苦_一。四_{大調和ノ} 故_ニ 無_シ 病苦_一。寿命無量_ニ 現_ニ 窮_ニ 聖徳_一 故_ニ 無_シ 死苦_一。由_リ 別意樂_ニ 故_ニ、設_テ 有_ニ 死生_一、随_テ 心_ニ 自在_{ナル} 故_ニ、不_レ 為_ニ 死苦_一。内_ニ 無_シ 愛著_一、外_ニ 無_シ 離別_一 故_ニ、無_シ 愛別離苦_一。内_ニ 無_シ 怨念_一、外_ニ 無_シ 違害_一。故_ニ 無_シ 怨憎会苦_一。微妙境界、随_レ 心_ニ 自在_{ナル} 故_ニ、無_シ 求不得苦_一。無_シ 地獄鬼畜刀杖殺縛等_一 故_ニ、無_シ 五陰盛苦_一。(中略) 彼土一切内外

境界ニ、悉ク生ニ六識深妙喜樂ヲ。且ク約ソ經文ニ、出其ノ一二。林池宮殿、衆寶嚴淨、微妙ノ色光、能ク生三眼樂ヲ。諸天妓樂、鳥樹羅網、種々音声、能ク生三耳樂ヲ。妙香飯食、宝衣經行、如レク、能ク生三鼻、舌、身ノ樂ヲ。宝地柔軟、微風適悅、飛行遊戲、亦生三身樂ヲ。觸諸ノ境界ニ、念ニセハ、仏法僧ニ、無量功德、能ク生三意樂ヲ。如レ是樂相、説ケテ、不能レ尽ス。極樂淨土の住人は死苦八苦や地獄の苦を免れることができ、見聞きする一切の境界を通して六識に深妙の喜樂がもたらされると源信も記している。もつとも法然は『無量寿経釈』において、宝樹のゆらめきが「常樂」を、そして宝池のさざ波が「四徳」を奏でると述べている。常・樂・我・淨の「四徳」の法が奏でられるという記述は、『阿弥陀経略記』のみならず『往生要集』所説の淨土十樂の第四「五妙境界樂」にも見出せない。『無量寿経』『観無量寿経』においても、宝池のさざ波が「苦・空・無我・無常」などを演説することが記されるのみである。

そこで法然に先立つ「常樂」の用例を探すと、「淨土五祖」の第一の祖である曇鸞（四七六一—五四二）が、『往生論註』卷下において「三種の菩提門に随順するの法」について説明する中で、次のように記している。

三ニ樂清淨心、以レノ令ルヲ一切衆生ヲ得ニ大菩提ヲ故、以下ノ撰取ノ衆生ニ生セシムルヲ彼国土ニ故。菩提ハ是レ畢竟常樂ノ処。若不ハ令三一切衆生得ニ畢竟常樂ヲ、則チ違ニ菩提ニ。此ノ畢竟常樂、依レテ何ニ而得、依ニ大乘ノ門ニ。大乘門ト者、謂ク彼安樂仏国土是也。是ノ故ニ又言ハリ以撰取衆生彼国土故¹²。

菩薩による「与樂」を説く部分ではあるが、曇鸞は「菩提は是れ畢竟常樂の処」と述べている。その「畢竟常樂」は大乗の門としての安樂仏国土において得られるため、極樂国土へと導くことがそのまま大菩提を得させる菩薩行になると曇鸞は論じている。また、「淨土五祖」の中心的人物である善導（六一三—一六八一）も、『観経疏』に以下のような文を記している。

唯可^下勤心^ニ奉^レ法^ヲ畢命^ヲ為^レ期^ト、捨^テ此^ノ穢身^ヲ、即証^ス彼^ノ法性^ノ之常樂^ヲ¹³。

此_レ明_下ス夫人真心徹到_ソ、厭_ニ苦_ノ娑婆_ヲ、欣_ニ楽_ノ無為_ヲ、永_ク帰_{スル}ル_ヲ常樂_ニ¹⁴。

「苦の娑婆」や「穢身」に相對するものとして、「法性の常樂」や「樂の無為を欣いて、常樂に歸す」などと記されている。同じく善導の『法事讚』には「四徳」の語も見られる。

弟子等敬_テ尋_ニス_ル諸_ノ佛_ノ境界_ヲ、唯_ニ佛_ノ能_ク知_玉ヘ_リ。国土_ノ精華_ハ非_ニス_ル凡_ノ所_ニ測_ル（中略）但_為ニ_ノ凡_夫乱_想寄_託ス_ルニ_無カ_レ由_故、使_下ム_積迦_諸佛_不捨_ニ慈_悲ヲ、直_ニ指_中西方_十万_億刹_上ヲ。国_名ニ_ケテ_極樂_ト、佛_号ニ_ス彌_陀ト、現_ニ在_ニテ_説法_ヲ玉_フ。其_ノ国_清淨_ニ具_セリ_四徳_ノ莊_嚴ヲ¹⁵。

仏の境界はただ仏においてのみよく知ることができ、凡夫には測り知ることなどできないため、釈尊は西方十萬億仏土の彼方の極樂世界を指し示した。その世界では阿彌陀仏が現に説法しており、四徳を莊嚴として具えていると善導はいう。これらの説明を合わせて解釈するならば、「四徳」「常樂」は仏の覺りに直結した法樂の表現と思われる。

凡夫が「常・樂・我・淨」と思い込んで執着せずにいられない自己の存在が、実は苦しみに満ち、仮初めの不確定で一時的なものに過ぎないと教え諭すのが「苦・空・無我・無常」の法である。そして、苦・樂や有・無などの相對的次元を超越した、絶對的次元において得られる確固たる存在と永遠常住の法樂が、仏の「常・樂・我・淨」の四徳である。法然は、極樂の事物が仏の覺りの智慧によつて莊嚴されているという点を認めつつも、その智慧は凡夫の執着を打破する法としてではなく、むしろそれに寄り添うように、絶對的な「常・樂・我・淨」の法樂として直接的にもたらされるのだと説いている¹⁶。

また法然は、阿彌陀仏の「感果」について次のように述べている。

此_ノ身量_之所得_依正_者、此_レ則_チ非_ニ別_者ニ、酬_ニ六_度万_行修_因ニ。四十八願_一無_ニ相_違一、如_ニ本_願一、顕_レ名_ニ所

得ノ依正者、聴聞ノ人人、不レ申前ニ知ニ食シ之ヲ。若シ積レ之ヲ、一一ノ依正、依ニ四十八願ニ積ス。別ニ在レ之、可レ讀レ之ヲ¹⁷。
阿弥陀仏の依正二報の内容は、四十八願と相違がなく、一々の願名に表されていると述べている。この言葉は、源信が『阿弥陀経略記』において「彼仏ノ依正、皆本由ニ本願¹⁸」と述べ、『阿弥陀経』の依正二報の描写と、『無量寿経』の四十八願の願名とを照合している部分を意識していると思われる。もつとも、前に引用した「四十八願の興意」に挙げられる「不更悲趣」「無有好趣」「念仏往生」などの願名は、『阿弥陀経略記』に列記される願名とは合致せず、むしろ源信と同時期の天台僧、静照（一〇〇三）の『阿弥陀如来四十八願釈』に記される願名と合致する。

静照は、法蔵菩薩が浄仏国土のための修行を進める中で、それを成就することのできない衆生を憐れみ、自らが修した行の功德を衆生に回施して発願する、という形式で一々の本願を解釈していく。法然は、静照の解釈において法蔵菩薩の慈悲が強く打ち出されているところに共感して、その願名を継承したのではないかと推測される¹⁹。このように、法然は『無量寿経釈』の説示において、善導のみならず慧遠や源信、静照などの本願解釈をも意識しつつ、極楽浄土が阿弥陀仏の慈悲によって建立された世界であることを強調している。

四 『逆修説法』における説示

建久五年（一一九四）頃に中原師秀が催した逆修法要の場における、一七日から六七日までの全六回の説法の記録と伝えられる『逆修説法』においては、「仏徳讃嘆」すなわち阿弥陀仏の徳を讃えるための説法が行われている。その第四回、四七日の説法において法然は、彼土此土を分けない天台的な仏身仏土観に言及している。ここでは諸仏に共通する「総」の功德として、法身・報身・応身の三身説が紹介されているが、その法・報の二身について、法然は次のように説

明している。

先ツ法身ト者は無相甚深之理也。一切ノ諸法畢竟空寂ナルヲ即名ク法身ト。次ニ報身ト者非ニ別物ニ、解リ知ル彼ノ無相之妙理ヲ智恵ヲ名ル報身ト也。所知ヲハ名ニ法身ト、能知ヲハ名ニ報身ト也。此ノ法報之功德、周ニ遍ニ法界ニ。無レ不云、周ニ遍菩薩二乘ノ之上、乃至六趣四生之上ニモ矣²⁰。

法身とは、「畢竟空寂」つまりとる全ての現象は空であるから、「無相」あらゆる相を超越し囚われないという「甚深の理」であるという。法然は法身を「所知」と位置付け、その理を解し知る「能知」の報身と別にあるものではないとした上で、それら二身の功德が全ての現象および全ての衆生の上に遍満していると説いている。

この「能知・所知」という表現は、源信の『阿弥陀経略紀』を参照しているものと推測される²¹。

二ニハ 顕ニ正因。舍利下至ニ一心不乱是也。意云、若一日二日乃至若七日、面ニ向シ西方ニ、観テス仏威光、偏照シ十方、無レ所ニ障碍ニスル。称スルニ名ヲ一心ニ、念ニ願シ生ニセンヲ彼国土ニ、淨信無レ疑ニ。応ニ如レ是修ス。(中略) 若欲レセハ修ニセント深觀ノ者、見ニ止觀ノ常行ニ三昧ノ文ヲ。或觀ニセヨ無縁ノ慈ヲ、是レ即チ深觀恵也。(中略) 意ノ云、無レト者法ノ空、即所縁ノ理也。性ハ即是レ法身ノ菩提 故也。大般若経ニ云ク、一切法ノ空ヲ説テ為ニ法界ト。即此レ法界ヲ説テ為ニ菩提ト云。縁ト者能縁、即是般若也。般若即是報身ノ菩提。慈悲利生ハ即是解脱 解脱即是應身菩提也。由レテ此ニ当ニ知ル。無縁ノ慈悲、是レ即チ諸仏三身万徳也。故大般若ニ云ク、諸仏如来ノ所有功德、大悲般若ノ二法ヲ為レ性ト。離ニ分別想、無ニ功用ノ心。利樂ソ有情ヲ、無ニ時トノ暫捨ル。已上 雖レ言フニ二法ト即具ス三徳ヲ。智及智処為ニ般若ト故離分別ノ言ハ兼 顯テ法身ヲ。無ニ分別、一切法常住ナリ。乃至補処ノ所有徳、皆是如来功德ノ一分也。応知。十方三世ノ仏衆法界ハ、不レ出ニ無縁ノ慈悲ノ光外ニ。此中ノ法身、偏ニ自他ノ身ニ、凝然常住ソ法界ノ性 故ニ、般若解脱、雖レ無ニ事用、無始時ヨリ来テ理性常然也 行人、応ニ念願ス。由ニ無縁ノ慈光明ニ所ニ照レ故ニ、得レ顯ニ自他ノ身本三身ノ性ニ²²。

源信は一日乃至七日の一心不乱の称名と共に、十方を遍く照す仏光を觀じるように説き、さらに「深觀」を求めらば「無縁の慈悲」を觀じよと勸めている。「無」は「所縁」「智處」としての法身の菩提、「縁」は「能縁」「智」としての報身の菩提、そして「慈悲」は応身の菩提をそれぞれ意味するため、「無縁の慈悲」には諸仏の三身万徳が全て含まれるというのである。そして源信は、「十方三世の仏衆法界は、無縁の慈悲の光外に出でず」と述べ、法身は自他の身にも遍満しているため、その光を觀じ照らされることで、自他および三身の本性が顯われると論じている。

一方、法然は「無縁の慈悲」の光には言及せず、代わりに阿弥陀仏の別徳として白毫の一相から放たれる光に話を移すが、そこでも源信の著作『阿弥陀仏白毫觀』に則して、白毫の因、相貌、作用、体性、利益の解説をしていく。源信はその第四「白毫の体性を觀ず」の説明において、白毫に空・仮・中の三諦が具わること論じ、「三種世間、三千法門、一切諸法具足、無闕クル」²³と述べている。そして自心にも三千法が具足していると述べて『觀無量壽經』の「是心作仏、是心是仏」の文を挙げ、続く第五「白毫觀の利益」の説明において、滅罪と見仏とが果たされることを論じている。法然も第四「白毫の体性」²⁴の説明において源信の円融三諦の説明を踏襲し、「天台宗の意」と断りつつ「凡ソ於テ此レ三諦ノ理ニ、凡聖互ニ備ヘ、迷悟俱ニ具セリ。然ハ者、阿鼻ノ依正全處ニ極聖ノ自心ニ、毘盧ノ身土ハ不レ越ニ凡下ノ一念ヲ於テと述べる。もつとも、法然はそこで白毫觀に言及しない。第五「白毫の利益」についても次のように説いている。

次ニ白毫ノ利益トハ者、觀仏三昧經ニ云ク、觀此ノ相ヲ者ハ、除却ニ九十六億那由他恒河沙微塵數劫ノ生死之罪ヲ。是則、不レ具ニ彼ノ三諦觀ヲ、但觀ニ此ノ白毫ノ之相許リヲ、滅スル如ク此ノ多劫之罪ニ也。或ハ卷ニ並テ白糸ヲ、見レ之猶滅ト上ノ業罪ヲ云。此レ惠心ノ御意也。²⁶

ここでは「惠心の御意」として白毫觀に言及するが、その利益として滅罪のみを挙げ、見仏には触れないのである。その反面、法然は第三「白毫の作用」の説明において、「就レテ之得レレハ意者、惣ソ六道四生一切凡聖ハ、併ラ被レレ疑ニ弥陀如来

之毫光ノ所現歟ト者ナリ也²⁷と、独自の言葉を差し挟んでいる。法然は、阿弥陀仏の側に一切凡聖を現し出すほどの力用があることに注視する反面、凡夫の心が阿弥陀仏を現し出すことについては言及を控えているのである。

ちなみに法然は、白毫の光から仏身が現し出されることについて説明する中で、「如ニツ釈迦如来ニ現ニル八相²⁸」と「八相成道」に触れている。そこで典拠の『阿弥陀仏白毫観』を見ると、次のように記される。

三ニ観ニト白毫ノ作用ヲ者、謂ク彼ノ一々ノ光明、遍照ツ十方世界ニ、念仏衆生ヲ撰取ソ不レ捨^{玉ハ}。彼ノ衆生中、若シ有レラハ^{下キ}應^{下キ}以ニ^テ九界ノ身ニ度ス者ハ、此ノ光随^レレテ^テ現ニ^シ彼ノ形声ニ或ハ冥ニ或ハ

顯ニ利益無^シ窮^リ29。

光から仏身が現し出されることのみが記され、「八相成道」に関連する記述が見られない。一方、源信の著作と伝えられる『観心略要集』にもほぼ同様の記述があり、そこには「若シ有^レハ^{下キ}應^{下キ}以ニ^テ仏身ニ得度ス者ハ、此ノ光即^チ現ニ^ス八相成道^ニ30」と記されている。『観心略要集』は現代において偽撰が指摘されているが、法然はそれも源信の著作と見なし、一部の記述内容を受用しているようである。

このように、法然は『逆修説法』四七日の仏徳讃嘆の説法において源信の著述を多用している。彼此を分けない一元的な仏身仏土論にも言及するため、法然の基本的な仏土解釈と反するようにも思われるが、そこで法然は『阿弥陀経略記』や『阿弥陀仏白毫観』『観心略要集』などに記載される観心念仏には触れず、一貫して阿弥陀仏の力を強調しているのである。

法然は『逆修説法』六七日の経徳讃嘆の説法において『観経』の説明をするにあたり、次のように説いている。

而^ニ今^此ノ^レ経^ハ往生浄土ノ教也。不^レ明^ニ即身頓悟ノ之旨^{ヲモ}、不^レ説^ニ歴劫迂廻之行^{ヲモ}。説^テ娑婆之外^ニ有^ニ極楽^ニ我身之外^ニ有^ニ阿弥陀^上、而明^乙可^レ願^下厭^下此^ノ界^ニ生^ニ彼^ノ国^ニ得^中無^レ生^忍上^ヲ之旨^{ヲモ}也³¹。

『観経』においては、娑婆の外に極楽があり、自身の外に阿弥陀仏がいるという教えが説かれていると明言している³²。法然においては、娑婆世界を厭い極楽浄土に往生して、彼土において無生法忍を得るのが「往生浄土の教え」なのであり、源信の著述もそれを逸脱しないように取捨および会通をしながら用いられている。

『逆修説法』五七日の仏徳讃嘆の説法においては、阿弥陀仏の依正二報が取り沙汰されている。その依報の説明において法然は、宝地に関する浄土三部経の描写の相違に注目している。

今^ニ当座^ノ御導師、私^ニ得^レ意候^ニ有^リ四義^一。先^ツ以^テ実^ヲ論^セ之者、以^テ不可説無量^ノ宝^ヲ而^為極楽世界^ノ地^ト。次^ニ双卷^ノ經^ニ説^ク七宝^ヲ為^ル地^者、此娑婆世界^ノ之習^ハ、以^テ金銀等^ノ七宝^ヲ為^ル殊勝^ノ宝^ト故^ニ、仏、欲^フ為^ル世界^ノ衆生^ノ令^レ起^ル樂欲^ノ心^ト令^レ進^ム欣求^ノ心^ト、拳^ニ此^ノ土^ノ勝^{タル}宝^ヲ為^ル彼^ノ國^ノ地相^ト事^ヲ説給^{ヘル}也。次^ニ観経^ノ中^ニ瑠璃^ヲ為^ル地^者、此^ノ經^ハ自^レ本^ノ欲^フ為^ル世界^ノ衆生^ノ勸^ム觀想^上説給^{ヘル}故^ニ、由^テ瑠璃^ハ其^ノ相似^{タル}水^ニ、為^ル此^ノ娑婆世界^ノ水^ヲ為^ル觀^前方便^上、説^ク瑠璃^地也。次^ニ阿弥陀経^ニ説^ク黄金^ヲ為^ル地^者、彼^ノ七宝^ノ中^ニ亦^レ以^テ金^ヲ為^ル第一^ノ宝^ト。是^レ猶^ラ取^テ詮^ヲ拳^ニ最上^ノ宝^ト顯^ス彼^ノ國^ノ地^ヲ、為^ル勸^ム欣求^ノ心^ト也³³。

第一に法然の自説として、三部経の宝地の描写の中から一つ選ぶのではなく、「不可説無量の宝」こそが本意だとする。極楽浄土の地面には、説き尽くせないほどの無量の宝が散りばめられているというのである。その上で法然は、三部経においては釈尊の意図により、この娑婆世界にも存在する宝が挙げられているのだと解釈していく。すなわち、『観経』においては観想の方便として、釈尊はあえて水に似た「瑠璃」のみを取り上げたという。また釈尊は、『無量寿経』においては「殊勝の宝」「勝れたる宝」である七宝へ、そしてさらに『阿弥陀経』においては「第一の宝」「最上の宝」である黄金へと絞り込むことで、「欣求」すべき目標を明確化したというのである。

この経文における宝地の描写の相違については、源信の『阿弥陀経略記』において次のように会通されている。

問、観經ニハ、云ニ瑠璃地ト。何ガ故ニ今言ニ黄金ト。解ソ曰ク、思益經ニ説ニキテ、未來須弥灯王仏ノ国ニ、以テ閻浮金瑠璃ヲ為レ地。準レ彼ニ思フニ之ヲ、黄金ニ不映徹。瑠璃非ニ金色。彼土金色ニ亦應ニ映徹。故ニ俱ニ得名ヲ。又、観經ニ云ク、瑠璃地ト。上ニ、以テ黄金ノ繩ヲ雜廁間錯ト云。一ニ宝ヲ以成セリ。故ニ亦、俱ニ名ク³⁴。

源信は、『思益経』所説の須弥灯王仏の国土を例に挙げて、極楽の宝地も瑠璃と黄金の二種の宝からなると推測している。それを受けて平安後期の南都浄土教者である永観（一〇三三—一一一一）は、『阿弥陀経要記』において、次のように論じている。

今云ク、思益経ノ文等、未ニ必シモ可レ証。由レ此ニ可レ謂。観經ハ為ニナリ初心ノ行者ノ。水想観ノ次ニ説ク瑠璃地ト。見ニテ氷ノ映徹、作ニ瑠璃ノ相。観門其便アリ。理、実ニハ、彼ノ土ハ七宝ヲ為レ地。故ニ花坐観並ニ双卷経ノ七宝ヲ為レ地ト。但シ今経ニハ、説ニ黄金ヲ為レ地。且ク拳レ勝ヲ耳³⁵。

永観は、別の浄土に関する『思益経』の描写は必ずしも証拠とならないと指摘する。そして、現実には『無量寿経』所説の七宝をもって宝地とするが、その中から『観経』は瑠璃、『阿弥陀経』は黄金を取り上げているのだと解釈している。永観は、あくまでも浄土三部経の記述の内での会通を試みたのである。

法然は、その永観の発想を参照しつつも、自説として「不可説無量の宝」を実義としている。その典拠を探ると、『無量寿経』の四十八願の第三十二「国土嚴飾」の願に次のように記されている。

設シ我レ得シニ仏ニ、自レ地已上、至ニマテ于虚空ニ、宮殿樓觀、池流華樹、國中ノ所有一切ノ万物、皆以ニ無量ノ雜宝百千種ノ香ニ而共ニ合成シ、嚴飾奇妙ニ超ニ諸ノ人天ニ。其ノ香普ク薰ツ十方世界ニ、菩薩聞ク者ノハ、皆修ニ仏行ヲ。若不レハ、如レ是者、不レ取ニ正覺ニ³⁶。

極楽の地面より上、虚空に至るまでのあらゆる万物が「無量の雑宝」および百千の香りによって莊嚴されることが、法藏菩薩によって誓われている。「無量」の宝を真実と位置付けるところに、『無量寿経釈』同様、法然の本願重視の姿勢が読み取れよう。また、善導が『観経疏』「定善義」において、『観経』宝地観の「瑠璃地」上^{ニハ}以^ニ黄金^ノ繩^ヲ雜^レ周^間錯^{セリ}³⁷』という一文を解釈するにあたり、次のように述べている。

言^{ヨリ}金繩^ト已^ハ下^ハ、正^ク明^ニ黄金^ヲ作^レ道^ト狀^ニ似^ル金繩^ニ也。或^ハ以^ニ雜^ル寶^ヲ為^ス瑠璃^ト作^レ道^ト、或^ハ以^ニ瑠璃^ヲ為^ス地^ト、
白玉^ヲ作^レ道^ト、或^ハ以^ニ紫^金白^銀為^ス地^ト、百^宝作^レ道^ト、或^ハ以^ニ不可^説寶^ヲ為^ス地^ト、還^タ以^ニ不可^説寶^ヲ作^レ道^ト（後略）³⁸

瑠璃の地面と黄金の繩のみに限られるわけではなく、他の宝や「不可説の宝」によって構成される地面や道もあるというのである。法然は、三部経の中でも最も多数の宝を挙げる『無量寿経』の描写を真実と位置付けるといふ永観の発想に則りつつ、さらに多くの宝に言及する本願の文、そして善導の解釈に注目し、「不可説無量の宝」こそが真実だと論じていると思われる。

ところで法然は、『逆修説法』二七日の地想観の説明において、瑠璃地を支える金幢の数に言及する。

其^ノ瑠璃^地ノ下^ニ有^ニ金剛^ノ七^宝ノ金幢^ノ擎^レ地^ト。其^ノ擎^{タル}金幢^ヲ、善導^ノ御意^ハ云^ニ無量^{無数}ト。他^師ノ意見^ト但^有一^ノ金幢^ノ擎^レ地^ト³⁹。

諸師がただ一本であると説くのに対し、善導のみが「無量無数」と解釈していると指摘している⁴⁰。法然においては、極楽浄土はあくまでも有相莊嚴の世界であるが、人知を超えた「不可説無量」「無量無数」の宝による莊嚴相であるというところに重きが置かれているようである。

宝地の解釈に話を戻すと、永観は『観経』の「瑠璃地」について観想のための方便だと説明するが、『阿弥陀経』の黄金については「勝」の宝と位置付けているのみで、その含意については言及していない。一方、法然は『無量寿経』に

「七宝」、そして『阿弥陀経』に「金」が挙げられるのは、衆生に「欣求の心」を發させるためだと重ねて説いている。この説示は、善導の『觀經疏』「散善義」の「深心積」に記される「決定深信、釈迦仏、説此觀經、三福九品定散二善ヲ、証讀、彼ノ仏ノ依正二報ヲ使_ニ人_ヲ欣慕_セ」⁴¹という文を意識していると思われる。また、源信も『往生要集』の大文第二を「欣求浄土」と名付けており、『阿弥陀経略紀』において次のように記している。

今説ニ極樂依正功德、令_テ諸ノ衆生_ヲ往_ニ生_ノ彼国_ニ乃至速_ニ証_セ無上菩提_上。故_ニ名_ニ本懷_ト。時衆於_テ極樂_ニ心雖_モ欣樂_ス、仏未_ダ聽_シ玉_ハ故_レ不_レ發_セ願_ヲ。心在_ニ岐道_ニ、專_ラ待_ツ仏勅_ヲ。感_應道交_ノ故_ニ、勸_ニ願生_ニ。〔中略〕同_ニ經_ニ行_シ金銀瑠璃嚴淨之地_一、同_ク遊_ニ戲_ス寂靜安樂無漏之境_ニ。誠_{ナル}哉_ニ極樂、誰_カ不_ニ欣求_一乎₄₂。

釈尊による極樂の依正二報についての説法を聞くことで、「欣樂」「欣求」の心を發すと記されている。極樂浄土の情景を想い描く觀想念仏を重要視しない法然においては、觀の方便として瑠璃が説かれたという意図よりも、「欣求」の思いを發させるために依正二報が説かれたという意図の方が、大きな意味を持ったことであろう。よって『逆修説法』五七日の説法の後半において『無量寿経』の説明がなされる際にも、「阿弥陀仏ノ修因感果ノ次第、極樂浄土ノ二報莊嚴之有様、委_ク説_キ給_ハルモ、為_レ令_下勸_テ衆生_ヲ發_サ欣求_ノ心上也₄₃」と述べられており、和文体の法然遺文「三部経釈」においても、「次に阿弥陀経は、まづ極樂の依正の功德をとく。これ衆生の願樂の心をすすめんがためなり⁴⁴」と説かれている。

さて、『逆修説法』五七日の依報の説明では、宝地に続けて宝樹・宝池・宝殿の説明がなされる。

次_ニ宝樹莊嚴_ト者、雖_モ珍_ニ地_一亦_モ無_シハ樹者、以_レ何_ヲ可_レ為_レ莊嚴_ト。此娑婆世界_ニ嚴_シ勝_ニ地_一申_モ、樹木_ナシト之_目出_ラコソ申_候。故_レ彼_ニ国_モ准_ニ此_土ニ説_ク宝樹ノ莊嚴_ト也〔中略〕次_ニ宝池_ト者、設有_レ樹_無シハ池者尚_モ莊嚴_無カ故_ニ、説_ク宝池ノ目出_キ莊嚴_無ハ宝殿_者、阿弥陀_諸ノ聖衆_モ可_レ居_ニ住_シ下_フ何_ニカ。故_ニ説_ク宮殿_ト也⁴⁵。

法然は、樹林や池も見事でなければ嚴勝の地とはいえないとして、「彼の国も此の土に准じて、宝樹の莊嚴をば説きたまへり」と説く。つまり宝樹や宝池についても、釈尊がこの世界の事物になぞらえて説いたと解釈しているのである。ここで法然は、善導の『觀經疏』「定善義」の宝池觀および宝樓觀に関する解釈を意識していると思われる。

此レ明下ス下宝樹雖精チヲト、若シ無シハ池水亦未レ名レ好ト、一ニハ為レメシシ不レシカ空ニセ世界ヲ、二ニハ為レニス莊ニ嚴センカヲ、為レニカス義ニ故ニ有中ト云下ヲ此ノ池渠ノ觀也⁴⁶。

此レ明下ス下淨土ニ雖下有ニテ流ニ灌注スト、若無シハ宝樓宮閣、亦未レ為レ精ト、為レテ依報ノ莊嚴種種円備甲スルヲ也⁴⁷。

善導は法然に先んじて、宝池・宝樓などがなければ精巧な世界とは言えないと述べているが、それらが存在することによつて極楽国土の空間が埋められ、莊嚴が円かに備わることも論じている。善導においては、釈尊ではなく阿弥陀仏の莊嚴の意図として語られているように思われる。

法然がこの善導の解釈を釈尊の説法の意図として語っているのも、前述の善導の「釈迦仏、此の觀經の三福九品定散二善を説きて、彼の仏の依正二報を証讀して、人をして欣慕せしめたまう」という言葉を意識してのことであろう。釈尊は觀經の実践を勧めるためではなく、人々に欣求の心を発させるために、この世の勝景になぞらえて極楽世界を説いたのだと、法然は解釈しているのである。ちなみに和語の法然遺文「十二の問答」には、法然の次のような言葉が記録されている。

問、極楽に九品の差別の候事は、阿弥陀ほとけのかまへさせ給へる事にて候やらん。

答、極楽の九品は弥陀の本願にあらず。四十八願の中にもなし。これは釈尊の巧言也。善人悪人一所にむまるといはば、悪業のものども、慢心をおこすべきがゆへに。九品の差別をあらせて、善人は上品にすすみ、悪人は下品にくだるとき給へる也。いそぎまいりてみるべし⁴⁸。

極楽に九品の差別が設けられているのは阿弥陀仏の意図したことなのか、という問いに対して法然は、釈尊の善巧方便なのだと答えている。これについても前述の善導の件の一文を意識していると思われるが、法然はその根拠として、九品の差別が四十八願に誓われていないことを挙げる。法然においては、四十八願こそが阿弥陀仏の浄土建立の真実を伝える、最も確かな教言と位置付けられているようである。その反面、本願に誓われていない事物については、娑婆の衆生に欣求の心を発すよう促す、釈尊の善巧方便も含まれていると考えているようである。

もつとも法然は、依報の説明を次のように締めくくる。

此^レ等^ノ依報、皆阿弥陀仏^ノ功德^{ナリ}也。加之、有^ニ自然^ノ衣服^一、有^ニ自然^ノ飲食^一、非^ス依^テ行者^ノ自力業因^ニ得^ル併^ラ阿
 弥陀如来^ノ願力也。尔^ハ者阿弥陀仏^ノ功德、非^ニ必^シ可^レ云^ニ相好光明^一、如^レ是^ノ依報^モ皆^シ彼^ノ仏^ノ願力所成^ノ功德也⁴⁹。
 極楽で得られる飲食や衣服も、みな行者の自力の業因によるものではなく、依報のすべてが阿弥陀仏の「願力所成」だと述べている。『選択本願念仏集』にも、「凡^ソ四十八願、莊^ニ嚴^ス淨土^一、華池宝閣、無^レ非^ト願力^ニ」⁵⁰と記されていることから、法然は宝池などの存在を否定しているわけではないと思われる。

「願力所成」の語は、『観無量寿経』の第七華座観に記される。

仏告^ニ韋提希^一、欲^ハ觀^ニ彼^ノ仏^一者、当^ニ起^ニ想念^一於^ニ七宝^ノ地^ノ上^ニ作^ニ蓮華^ノ想^一。(中略)如^レ此^ノ妙華^ハ是^レ本^ト法藏
 比丘^ノ願力^ノ所成^{ナリ}。若^ク欲^セ念^ニ彼^ノ仏^一者、当^ニ先^ニ作^ニ此^ノ華座^ノ想^一。⁵¹

第六「宝楼観」の後、空中に現れた弥陀三尊を目の当たりにした韋提希が、未来の衆生はいかにして弥陀三尊を観じるべきかと釈尊に尋ねる。すると釈尊は、仏に先立つてまずは宝地の上に咲く蓮華を観じるように説き、その華座は法藏菩薩の「願力所成」だと説くのである。つまり『観経』においては、華座が単なる依報ではなく、仏身に付随する莊嚴であることを示す際にこの語が用いられる。ところが、環興の『無量寿経述文贊』巻中では、『無量寿経』巻上の「所^レ

処^ル宮殿、衣服、飲食、衆^ノ妙華香、莊嚴之具、猶^シ第六天^ノ自然^ノ之物^ヲ、⁵²以降の一段を解説するに際して、「経曰所処宮殿至^ニ涅槃之道^ニ者、述云、此後依報殊勝、即万物嚴麗、衣服隨念等、願力所成也⁵³」と述べられている。その宮殿や衣服、飲食、華香などの莊嚴に関する経文は、本願の第二十七願や第三十八願などと対応しているため、「願力所成」なのだと環興はいうのである。法然はこの環興の解釈を踏襲して、華座のみならず依報莊嚴の全てが願力所成だと主張しているものと思われる。この語によって、極樂の依報が阿弥陀仏を主体とし、阿弥陀仏とは切り離せないものであることを示し、往生人の自力の業因による果報ではないことを強調しているのである。まして、いまだ往生を遂げていない凡夫にとって極樂淨土は理解を超えた世界であるのだから、その實際を確かめるには「いそぎまゐりてみる」しかない。

法然は「逆修説法」五七日の説法において、極樂の正報についても説明している。

又、觀音勢至及^ヒ彼^ノ土^ニ所有菩薩人天、併^ラ彼^ノ正報^ノ功德也。都^テ彼^ノ国^ノ人天^ハ目^モ鼻^モ非^ス我物^ニ、皆^ハ仏^ノ願力所成^ノ之^ノ功德也。頭目髓腦^ヲ五体身分、無^シ一^ト非^ニ云^フ阿弥陀仏^ノ願^ニ。譬^ハ如^シ此^ノ娑婆世界^ノ人^ノ子^ノ身体髮膚、併^ラ分^ツ父母^ノ身^ヲ。即此^ノ經^ニ被^{タル}説四十八願^ニ可^レ候也。五通^ノ願悉皆金色等^ノ願是也。然^ハ者唯阿弥陀仏、為^ニ彼国^ノ一切^ノ菩薩人天^ヲ、入^レテ^ハ目^ニ成^リ天眼通^ト、入^レテ^ハ耳^ニ令^レ得^ニ天耳通^ヲ、入^レテ^ハ心^ニ令^レ得^ニ他心智宿命智^ヲ、成^レテ^ハ足^ト令^レ得^ニ神足通^ヲ、成^レテ^ハ膚^ト成^ニ金色^ノ身^ト給^ル也。具足諸相^ノ願亦如^シ是^ノ、生^ル彼^ノ国^ニ人^ハ六根六識併^ラ阿弥陀仏^ノ之^ノ入^リ給^ル也⁵⁴。

淨土の住人たちの身体や肌の色、神通力なども依報と同様、仏の「願力所成」の功德であると説く。この説示も、環興の『無量寿経述文替』を意識していると思われる。環興は『無量寿経』巻上の「阿難、彼^ノ仏^ノ国土^ノ諸^ノ往生^セル者^ハ、具^ス如^シ是^ノ清淨^ノ色身、諸^ノ妙音神通功德^ヲ」⁵⁵という一文について、次のように解説している。

経曰阿難彼仏至^ニ神通功德^ニ者、述云第四願^ニ其所撰^ニ、有二^ノ、初生之報勝、即撰^ニ他方^ノ願力所成^ノ。後住之報妙、即撰^ニ

自土^一願之所成。初又有^二。此初正報微妙也。色身者即此真金願之報妙、音者即說一切智願之所成、神通者即供養他方仏願果也⁵⁶。

往生人の清淨の色身や神通力は、第四願や第二十四願、第二十五願などの成就によりもたらされたものだから「願力所成」だと述べられている。法然は、この環興の解釈を踏襲した上で、「人の子の身体髮膚、併しながら父母の身を分かつが如し」と述べ、さらに阿弥陀仏の身体との関連性を強調している。

また、阿弥陀仏が六根六識に「入る」と表現している点については、『観經』の第八「像想觀」の「諸仏如来、是^レ法界身^{ナリ}、入^リ一切衆生^ノ心想^ノ中^ニ」⁵⁷という言葉を連想させる。『観經』ではその文の後に、源信の『阿弥陀経略記』や『阿弥陀仏白毫觀』にも引用される、「是心作仏、是心是仏」などの文が記される。それら源信の著作における引用部は、前述の『逆修說法』四七日の説示とも関連しているため、この五七日の正報の説法は、四七日の説法と連続性があるものと思われる。この『観經』の文は觀想による見仏について説く部分ではあるが、法然に先立ち、善導が次のように解釈している。

二^ニ從^ニ諸仏如来^一下^ニ至^ニ心中^ニ已^レ来^ハ、正^ク明^ク諸^レ佛^ノ大^レ慈^レ心^ニ即^シ現^シ（中略）言^ハ法^レ界^ト者^ハ是^レ所^レ化^ノ之^レ境、即^チ衆生^界也。言^ハ身^ト者^ハ是^レ能^レ化^ノ之^レ身、即^チ諸^レ佛^ノ身^{ナリ}也。言^ハ入^レ衆生^ノ心^ノ中^ト者、乃^チ由^テ衆生^ノ起^テ念^ラ願^ス見^テ諸^レ佛^ヲ、仏^ヲ以^テ無^レ碍^智知^ス、即^チ能^レ入^レ彼^ノ心^ノ中^ニ現^シ玉⁵⁸。

衆生が仏を見たいと願うならば、仏は無碍智によってそれを知り、大慈悲の心からその者の想心に入つて姿を見せるといふ。善導は、「法界」は「所化」であり⁵⁹、仏こそが「能化」「能入」だといふ。仏を主体と位置付けるそれらの表現は、『逆修說法』四七日の報身についての説示を想起させる。法然はこうした善導の解釈を意識して、往生人が極樂浄土において得る心身の功德についても、肉体を具えた人格仏としての阿弥陀仏の主體的な行為によつてもたらされるのだと強

調しているのではなからうか。また、阿弥陀仏が一切凡聖を現し出す力用を有しているという四七日の説法も、ここに帰着すると捉えることができよう。

さらに法然は、宝樹や宝地、水鳥、宝閣などの莊嚴も、阿弥陀仏が法を宣べ流すために現し出したと説く。

加之、又見聞^{スレハ}一切ノ万物^ヲ者、皆生^ト念^ハ仏^ノ心^ヲ申^ヘ也。宝樹宝地水鳥宝閣^{マテ}、阿弥陀仏之^シ願^ヲ給^カ故^ト、^{コト}覚^ヘ候^ヘ。則

阿弥陀経^ニ云、欲令法音宣流变化所作^{云々}。天台宗ノ^ニ釈^ニ云、一仏成道、親見法界、草木国土、悉皆成仏、身長丈六、光

明遍照、其仏皆名、妙覺如来^上。双卷経^ニ雖^レ説^下宝樹宝池ノ有^様諸^ノ菩薩声聞ノ功德^上、経ノ^ニ題^ニハ^{ヘル}唯^ニ云^ニ無量寿

経^ト者、其ノ^レ経^ノ中^ニ所^レ被^レ説^諸ノ^レ功德莊嚴^ハ、併^ラ彼^ノ願^力所^成ナル^カ故^{ナリ}也⁶⁰。

ここでも傍証として、仏が親見することで法界における草木国土の全てが仏と成るといふ、天台の教説⁶¹を再び引用し、『無量寿経』所説の二報莊嚴はすべて阿弥陀仏の「願力所成」なのだ^{と結論づける}。

醍醐本『法然上人伝記』所収のいわゆる「二期物語」には、浄土宗建立の意図について語る、法然の次の法語が記録されている。

我立浄土宗^ニ意趣者、為^ニ示^{サムカ}凡夫ノ^レ往生^ヲ也。若依天台教相者、雖似^ト許^ニ凡夫往生^ヲ、判^{コト}浄土^ニ至浅薄也。若依天

相教相^ニ者、判^{コト}浄土^ニ雖甚深、全^ク不許^ニ凡夫ノ^レ往生^ヲ也。諸宗所談、雖異^一惣^テ不許^ニ凡夫ノ^レ往生^ニ云事^上。故^ニ依善導釈

義^ニ興浄土宗^ヲ時、即凡夫生^ト報土^ニ云事^顯也⁶²。

他宗派の教相においては浄土が階層的に分類されており、結局のところ凡夫が位の高い浄土に往生することは認められていない。善導の解釈に基づいて浄土宗を立てることで、初めて凡夫が報土に往生することが明らかになると法然は述べている。この『逆修説法』五七日の説示も、往生人が極楽浄土において得る身体や神通力、および見聞きする一切のものが、本願を成就した人格仏・阿弥陀仏を主体とする依正二報であつて、行者自身の修行の果報ではないことを強調

することで、行者の力に応じて往生すべき浄土が異なるという、階層的な往生浄土の解釈を暗に退けているものと思われる。

五 おわりに

『無量寿経釈』や『逆修説法』の記述をもとに、法然における極楽浄土の受け止めについて論考した。『無量寿経釈』においては、四十八願に基づいて極楽の依正二報が建立され、「四徳」の法楽がもたらされることが説かれている。また、『逆修説法』においては、極楽の宝地が「不可説無量」の莊嚴相であること、積尊が娑婆の衆生に「欣求」の心を発させるために極楽の依正二報を説いたということ、そして往生人が極楽において得る身体や神通力、さらに見聞きする一切の事物までもが、すべて行者本人の業報ではなく、阿弥陀仏に帰属する「願力所成」の依正二報であることなどが説かれている。

法然はこれらの説示において、浄土三部経や善導の解釈のみならず、浄影寺慧遠や璟興、源信や永観などの説をも受用している。特に『逆修説法』四七日の説法においては、源信の著述が多用されており、彼此を分けない仏身仏土観にも言及がなされているが、その反面、観心念仏については言及がなされず、六七日の説法においては唯心浄土・己心弥陀説が否定されている。法然は、極楽浄土の法楽の根底に仏の覚りの智慧があることを否定しないが、膨大な知識の中から諸師の説を自在に取捨し、独自の解釈を交えながら説くことで、むしろ人格仏としての報身・阿弥陀仏の慈悲のほたらきを強調しているのである。

また法然は、極楽浄土を衆宝莊嚴の有相世界と受け止めているが、観想念仏を廃捨していることもあり、その莊嚴相について細かに語ろうとはしない。「欣求」すべき対象ではあるが、その実際は娑婆の凡夫にとって「不可説」なのである。

法然における極楽浄土とは、阿弥陀仏が慈悲の心によつて、四十八願を成就し建立した世界というところに尽きるのであり、法然においてはその世界について論理的解釈を加えることよりも、それを建立した阿弥陀仏、そして四十八願の中でも最も慈悲の力が顕著に表れる第十八「念仏往生」の願を信仰することの方に重きが置かれているものと思われる。

〈参考文献〉

- 佐藤澄賢「往生に就ての一考察」『仏教論叢』二、一九四八
- 藤堂恭俊「無量寿経論註に説示せられる仏身土に関する見解」『仏教文化研究』二、一九五二
- 藤吉慈海「法然上人の浄土観―その時機相応性をめぐつて―」『仏教文化研究』一〇、一九六一
- 香月乘光「法然上人の浄土観」『仏教大学研究紀要』五〇「浄土」特集号、千賀眞順「浄土」の特集号について一九六六
- 藤吉慈海編「往生浄土の理解と表現」知恩院浄土宗学研究所、一九六六
- 藤本浄彦「選択集」における「往生」の概念」『宗学研究』七、一九七二
- 真田康道「法然上人の浄土観」『仏教論叢』一八、一九七四
- 服部正穂「法然上人の浄土思想」『同朋大学論叢』三三、一九七五
- 末木文美士「永観『阿弥陀経要記』について」『印度学仏教学研究』四九、一九七六
- 深貝慈孝「逆修説法」における中国聖道家の文献引用」(藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 研究篇)一九八八年
- 高橋弘次「法然の浄土観」『浄土宗学研究』二〇、一九九三
- 福原隆善「阿弥陀仏の別徳」『浄土宗学研究』二〇、一九九三
- 齋藤蒙光「法然上人における極楽浄土の説示―「無量寿経釈」「逆修説法」「選択本願念仏集」を通して―」知恩院浄土宗学研究所『八

百年遠忌記念 法然上人研究論文集』、二〇一一
 曾根宣雄 『逆修説法』四七日の三身論についての再検討』『大正大学研究紀要』第九六号、二〇二一
 齋藤蒙光 『法然の阿弥陀仏解釈―『逆修説法』と『阿弥陀経略記』との関連性―』『共生文化研究』四、二〇一九
 齋藤蒙光 『法然と静照の浄土教―四十八願の解釈をめぐって―』『共生文化研究』五、二〇二〇

1 齋藤論文〔二〇一〕。

2 昭和二二年発行の『仏教論叢』一には、今生における「浄仏国土思想」と往生浄土思想との関係性に関する、望月信亨の講演および大野法道・江藤澄賢・千賀真順・香月乗光・藤田寛雅・佐藤賢順の共同研究が収録されている。昭和二〇～三〇年代にかけて、浄土宗教学院より発刊された『仏教論叢』『仏教文化研究』には、藤堂論文や佐藤論文、藤吉論文など、極楽浄土をテーマとする論文が多数発表されている。また、昭和四一年に知恩院浄土宗学研究所より発行された『往生浄土の理解と表現』では、六十六名の著名な宗門人が浄土および往生の意義について論じている。

3 藤堂論文。

4 香月論文。この主張は、藤本論文や真田論文に継承されている。

5 高橋論文においても、阿弥陀仏の本願によって建立された世界（依報・報土）であること、指方（西方）立相（莊嚴）の世界として捉えられること、その世界を求める衆生にとっては有相但著の世界であることの三つの要旨が掲げられている。

6 『昭法全』七四頁。『無量寿経釈』引用文は、元亨版本に基づいて翻刻した。

7 『浄全』五、二七頁上～下。

8 憬興『無量寿経連義述文賛』卷中（『浄全』五、一三〇頁下）

9 『昭法全』七四頁。

10 『昭法全』七五頁。

11 『恵心僧都全集』一、三八八～三九〇頁。

- 12 『浄全』一、二五二頁下。
- 13 『浄全』二・二頁上。
- 14 『浄全』二・二七頁上。
- 15 『浄全』四・三頁下、四頁上。
- 16 法然に先立ち、天台僧・真源（二〇六四―一三三六）が、『順次往生講式』において「常樂我淨の調、上求菩提の心を催し、苦無常の音に化下衆生の思いを増さん」などと、常・樂・我・淨に言及している（佐藤哲英『叡山浄土教の研究 資料編』一二五頁上）。
- 17 『昭法全』七九頁。
- 18 『恵心僧都全集』一、四三五頁。
- 19 詳しくは齋藤論文（二〇二〇）を参照されたい。
- 20 『昭法全』二五五頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二二七―八頁。
- 21 詳しくは曾根論文、齋藤論文（二〇一九）を参照されたい。
- 22 『恵心僧都全集』一・四一―二頁。
- 23 『恵心僧都全集』三・五八一頁。
- 24 『逆修説法』では五つの項目から「観」の字が省略されていることが福原論文で指摘されている。
- 25 『昭法全』二五七頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二二六頁。
- 26 『昭法全』二五八頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二二六頁。
- 27 『昭法全』二五七頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二二四頁。
- 28 『昭法全』二五七頁、『黒谷上人語録写本集成』一・二二三頁。
- 29 『恵心僧都全集』三・五八〇頁。
- 30 『恵心僧都全集』一・二八四頁。
- 31 『昭法全』二七一―二頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二七二―三頁。

32 高橋論文は、この法然の説示と『観心略要集』の「我身即弥陀。弥陀即我身、娑婆即極樂、極樂即娑婆。(中略)翻一念妄心、而思法性理、己心見仏身、己心見淨土」(『恵心僧都全集』一、二八八頁)という文とを対比し、法然は凡夫の機根の見定め、天台の本覚法門における己心の弥陀・淨土(不二絶対の世界観)から、始覚法門における有相の弥陀・指方立相の淨土(而二相對の世界観)へと降り立ったと論じている。

33 『昭法全』二六二頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二三九〜四〇頁。

34 『恵心僧都全集』一、三九六頁。

35 末木論文、『印度学仏教学研究』四九、三五二頁。

36 『淨全』一、九頁。

37 『淨全』一、四〇頁。

38 『淨全』二、三八頁下〜三九頁上。

39 『昭法全』二三九頁、『黒谷上人語灯録写本集成一』一六二頁。

40 善導および諸師の金幢についての解釈の相違、およびそれらに関する法然の解釈については、深貝論文に論じられている。

41 『淨全』二、五六頁上〜下。

42 『恵心僧都全集』一、四〇八〜一〇頁。

43 『昭法全』二六六頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二五三頁

44 『昭法全』四五頁、『龍谷大学善本叢書一五 黒谷上人語灯録』五六五頁

45 『昭法全』二六二頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二四〇〜一頁。

46 『淨全』二、四二頁上。

47 『淨全』二、四三頁下。

48 『昭法全』六三三〜四頁。『龍谷大学善本叢書一五 黒谷上人語灯録』六三八頁上。

49 『昭法全』二六二頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二四二頁。

- 50 『昭法全』三三一頁、土川勸学宗学興隆会本三六頁。
- 51 『淨全』一・四二頁。
- 52 『淨全』一、一六〇七頁。
- 53 『淨全』五、一四二頁上。
- 54 『昭法全』二六三頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二四三頁。
- 55 『淨全』一、一六頁。
- 56 『淨全』五、一四二頁上。
- 57 『淨全』一・四三頁。
- 58 『淨全』二、四六頁下〜四七頁上。
- 59 例えば曇鸞の『往生論註』は、この『觀經』の文について次のように解釈している。
 法界^ハ是^レ衆生^ノ心法也。以^三心能生^{スル}世間出世間^ノ一切諸法^ヲ、故^ニ名^レ心^ヲ為^テ法界^ト。法界能生^{スル}諸^ノ如来^ノ相好身^ヲ、亦如^シ色等^ノ能生^{スル}眼識^也。是^ニ故^ニ仏身^ヲ名^フ法界身^ト。(『淨全』一、二三一頁上)
- 「法界」とは衆生の心によって描き出されるものであり、仏の相好も例外ではないと論じる。つまり、衆生の観じる心の側を主体として、『觀經』の文を解釈しているのである。
- 60 『昭法全』二六三頁、『黒谷上人語灯録写本集成二』二四四〜五頁。
- 61 宝地房証真『止觀私記』卷一（鈴木學術財団『大日本仏教全書』三十七・五九頁a）などに記されている。
- 62 『昭法全』四四〇頁、藤堂恭俊博士古稀記念『藤堂恭俊博士古稀記念 浄土宗典籍研究 資料篇』一四五〜六頁。

キーワード 法然・極楽・浄土・逆修説法・無量寿経釈

(さいとう むこう 東海学園大学 人文学部・共生文化研究所 准教授)